

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 白峰方言の音声・音韻

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002501">https://doi.org/10.15084/00002501</a>

# 白峰方言の音声・音韻

新田 哲夫

## 1. はじめに

この章では、白峰方言の音声・音韻について、概略を示す。

## 2. 音素目録

以下にこの方言の母音と子音の音素目録を示す。

### 2. 1 母音音素

短母音音素は、標準語の同じで /i/, /u/, /e/, /o/, /a/ の5つである。/u/, /o/は円唇母音で、/u/は基本母音の[u]よりも中央寄りである。標準語に対応する/i/と/e/, /u/と/o/は白峰でも音韻的対立があり、区別される。

長母音音素は /i:/, /u:/, /e:/, /o:/, /a:/ の5つであり、調音的には短母音と同じである。白峰本来の語 (/me:/「目」, /to:/「十」, /he:/「稗」, /hja:/[ça:]「灰」などの1音節語を除くもの)では、長母音が語末に立つものは少数である。

表1 短母音体系

	Front	Back
High	i	u
Mid	e	o
Low	a	

表2 長母音体系

	Front	Back
High	i:	u:
Mid	e:	o:
Low	a:	

### 語例

/i/	/ita/ [ita] 「板」	/kai/ [kai] 「貝」
/u/	/uta/ [uta] 「歌」	/kau/ [kau] 「飼う」
/e/	/eto/ [eto] 「干支」	/kae/ [kae] 「飼え」
/o/	/oto/ [oto] 「音」	/iome/ [iome] 「魚」
/a/	/ato/ [ato] 「跡」	/siai/ [çiai] 「試合」
/i:/	/i:tja/ [i:tea] 「痛い」	
/u:/	/u:si/ [u:çi] 「薄い」	
/e:/	/e:ŋo/ [e:ŋo] 「英語」	
/o:/	/o:sja/ [o:çæ] 「遅い」	/sumo:/ [sumo:] 「相撲」
/a:/	/a:kja/ [a:kia] 「赤い」	

## 2. 2 子音音素

子音の音素目録は表3のとおりである。

子音音素は /p, b, m, t, d, n, s, z, r, k, g, ŋ, N, h, w, j/ の16種類である。表3に子音体系と異音を示す。

表3 子音体系

		両唇	歯茎・硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂	無声	p [p]	t [t, t̥~t̚, tɕ]	k [k]	
	有声	b [b]	d [d]	g [g]	
鼻音		m [m]	n [n]	ŋ [ŋ]	N [N, n, m, ŋ]
摩擦	無声		s [θ~s, ɕ]		h [h, φ, ç]
	有声		z [ð~z~ɕz, z~ɕz]		
はじき			r [r]		
接近		w [w]	j [j]		

白峰方言の伝統的な発音では、標準語「ツ」に対応する/tu/は[t̥u]のように破擦性が少ない音で出る（一方、標準語「チ」に対応する/ti/は常に破擦音[teɪ]である）。また形容詞活用の交替を並行的に捉えるため、この報告では破擦音の系列 /c/を立てないでおく。すなわち、/tu/ [t̥u], /ti/ [teɪ]の他に /tja/ [teɪa]等としておく。以下の形容詞の例では、「固い、重たい」の交替について tja ~ to を設定しておくことで、kja ~ ko, nja ~ no のような Cja ~ Co (Cは子音) と並行的に捉えることができる。

- /ka:tja/ 「固い」 ~ /ka:to-naru/ 「固くなる」
- /obotja/ 「重たい」 ~ /oboto-naru/ 「重くなる」
- /ta:kja/ 「高い」 ~ /ta:ko-naru/ 「高くなる」
- /sukunja/ 「少ない」 ~ /sukuno-naru/ 「少なくなる」

以下、変異音について特筆すべき点を列挙する。

- ・/sa, so/, /za, zo/ の子音は、[s], [z]のほか、歯(茎)摩擦音[θ], [ð]で発音されることがある (/sakana/ [θakana] 「魚」, /aza/ [aða] 「痣」)。
- ・/si/, /zi/ の子音は、歯茎硬口蓋摩擦音の [ei], [zi] (/sizimi/ [eizimi] 「蜷」)である。
- ・/se/, /ze/ の子音は、著しい口蓋化は見られないが、[sie], [zie]も聞くことがある。
- ・/tu/の子音は、現代では破擦音の[t̥u]で現れるが、古い世代ほど摩擦性の少ない破擦音 [t̥u]で発音される(/tuba/ [t̥uba] 「唾」、岩井隆盛 1959)。
- ・/zu/ は[ðu] (/zukin/ [ðukin] 「頭巾」, /zurui/ [ðurui] 「狡い」) で現れる。
- ・/ti/の子音は、実際は、[teɪ]の歯茎硬口蓋破擦音 である。伝統的な発音でも、[ti]の音が現れることがないため、/ti/で破擦音[teɪ]を表す。

・/hi/の子音は、硬口蓋摩擦音の[çi]よりも、声門摩擦音の[hi]で現れることが多い。また、/hu/の子音は、両唇摩擦音の[φu]である。

・日本海沿岸地域に広く見られる唇音化した軟口蓋音[kʷ], [gʷ]は見られない(/kasi/ [kaci] 「菓子」, /gaikoku/ [gaikoku] 「外国」)。

### 2. 3 子音音素の出現制限

この方言で子音の出現制限で、特筆すべきことは次のことである。

- ・/ŋ/は語頭に現れない。この制限は/ŋ/を持つ他の方言と共通である。
- ・/N/が語頭に現れる。ただし次に続く音素が/n, m/の場合だけである。音声的には、2モーラ目の鼻子音と同じ調音位置の子音が語頭に現れる。例：/Nmame/ [mmame] 「馬」, /Nneru/ [nneru] 「濡れる」, /Nnjakoi/ [nniakoi] 「柔らかい」, /Nna/ [nna] 「赤ん坊」「皆」(二つはアクセントが異なる)。

### 3 音節構造とモーラ

音節構造を次のような部分、「前頭」**pre-Onset**, 「頭」**Onset**, 「わたり」**Glide**, 「音節の核」**Nucleus**, 「尾」**Coda**, に分けて表すと次のようになる。

(preO) (O) (G) N (Co)

preO = /N, p/, O = /p, t, k, s, b, d, g, z, m, n, ŋ, r/, G = /j/,

N = /i, u, e, o, a/, /iː, uː, eː, oː, aː/, Co = /N/, /p, t, k, s/, /b, d, z, r/

・先にあげた語頭で現れる/N/を「前頭」pre-onset とする。例：/Nmame/ [mmame] 「馬」, /Nneru/ [nneru] 「濡れる」, /Nnjakoi/ [nniakoi] 「柔らかい」, /Nna/ [nna] 「赤ん坊」「皆」。聴覚的な印象では、語頭の/N/が一つの独立した音節を形成するほど長くなく、また次の子音と同一の鼻子音しか現れないという制限があるため、後の音節の核に依存した存在と見なした方がよいと判断する。

・語頭の「前頭」pre-onset で、阻害音/p/が現れる例が一例見つかっている。/ppetja/ [p`p`etca] 「冷たい」である。歴史的には/tubetja/の語頭音節が落ちて重子音が生じたものである。この語頭の/p/も現れるのはこの語のみであり、語頭の子音部分は聴覚的にも音節の核を形成するほどの長さを有していない。

・「音節の核」nucleus となれるのは、母音である。母音は常に音節形成に必要である。

・語末で「尾」coda となれるのは/N/だけである (/boN/ 「盆」, /miN/ 「見ない」)。

・語中に音節の「尾」coda があつた場合、次の音節の onset とともに音声的な重子音、いわゆる「促音」を形成する。これは多くの方言で共通する現象である。

・有声子音の重子音は/zz/, /dd/, /rr/がある。/zz/ は、/kozzo/ [koddzo] 「去年」が見つかっているだけである (/koozo/ [kooðo]もある)。/dd/や/rr/の重子音は、歴史的には /ri, re/が後続子音に変化して生じたものである。/hadde/ (< \*haride) 「針仕事」, /warra/ (< \*warera) 「おま

えたち」。

以下に、音節の一例をあげる。

O=/k/, N=/i, u, e, o, a/

/ki/ /kita/ [kita] 「来た, 着た, 北」

/ku/ /kuta/ [kuta] 「食った」

/ke/ /keta/ [keta] 「桁」

/ko/ /kote/ [kote] 「籠手」

/ka/ /kata/ [kata] 「肩, 型, 方 (方角)」

O=/k/, G=/j/, N=/u:, o:, a:/

/kju:/ /kju:ni/ [kju:ni] 「急に」

/kjo:/ /kjo:/ [kjo:] 「今日」

/kja:/ /kja:ni/ [kja:ni] 「こんなに」

O=/k/, N=/i, u, e, o, a/, Co=/N/

/kin/ /kin/ [kin] 「着ない」

/kun/ /kunda/ [kunda] 「汲んだ, 組んだ」

/ken/ /ken/ [ken] 「県, 臆」

/kon/ /kon/ [kon] 「来ない」

/kan/ /kan/ [kan] 「勘, 缶, 管, 棺」

O=/k/, G=/j/, N=/a/, , Co=/N/

/kjan/ /kjanna/ [k'anna] 「こんな」

O=/k/, N=/i, u, e, o, a/, Co=/t/

/kit/ /kitta/ [kitta] 「来た, 着た, 北」

/kut/ /kutto/ [kutto] 「くっと」(擬態語)

/ket/ /ketta/ [ketta] 「蹴った」

/kot/ /kotta/ [kotta] 「凝った」

/kat/ /katta/ [kata] 「勝った, 刈った」

O=/s/, N=/i, u, e, o, a/

/si/ /sita/ [eita] 「した, 下, 舌」

/su/ /sue/ [sue] 「吸え, 末」

/se/ /sedo/ [sedo] 「背戸」

/so/ /sode/ [sode] 「袖」

/sa/ /saka/ [saka] 「坂」

O=/s/, G=/j/, N=/u, o, a/

/sju/ /sjuzin/ [euzin] 「主人」

/sjo/ /sjo/ [eo] 「しよう」(「する」の活用)

/sja/ /sjasin/ [eaein] 「写真」

O=/s/, G=/j/, N=/u, o, a/, Co=/N/

/sjun/ /sjunbun/ [eunbun] 「春分」

/sjo/ /sjonben/ [eonben] 「小便」

/sja/ /sjanzja/ [eanza] 「そうだ」

O=/z/, N=/i, u, e, o, a/

/zi/ /ziro/ [dziro] 「囲炉裏」

/zu/ /zubame/ [dubame] 「桑の実」

/ze/ /zen/ [dzen] 「銭」

/zo/ /zo/ [do] 「ぞ」(終助詞)

/za/ /zasiki/ [daeiki] 「座敷」

O=/t/, N=/i, u, e, o, a/

/ti/ /tikara/ [teikara] 「力」

/tu/ /tume/ [tume] 「爪」

/te/ /teppo/ [teppo] 「鉄砲」

/to/ /toko/ [toko] 「床」

/ta/ /tani/ [tani] 「谷」

O=/t/, G=/j/, N=/u:, o:, a:/

/tju:/ /tju:nu:/ [teu:nu:] 「中宮」(地名)

/tjo:/ /tjo:tjome/ [teo:teome] 「蝶」

/tja:/ /tja:/ [tea:] 「父さん」

O=/m/, N=/i, u, e, o, a/  
/mi/ /miji/ [miji] 「右」  
/mu/ /muji/ [muji] 「麦」  
/me/ /mekata/ [mekata] 「目方」  
/mo/ /moti/ [motei] 「餅」  
/ma/ /mati/ [matei] 「町」

#### 4. 標準語との対応関係

標準語との対応関係で特筆すべきものをあげる。これらは、共時的な音韻特徴というより、歴史的な音変化によって、ある固有の語彙に見られるようになった特徴であるが、この小章で述べておくことにする。

##### 4. 1 /Cai/から生じた音をもつ語

歴史的に/Cai/から生じ、/Cja/, /Cja:/ (Cは子音, Oヤ, Oヤーのこと)に変化したと考えられる語がいくつかある。

まず、語尾に-aiをもつ形容詞のほとんどがそれに該当する。例えば、/a:kja/「赤い」、/ta:kja/「高い」、/obotja/「重たい」、/kujta/「食いたい」(～タイは形容詞扱い)などがあげられる。ただし、「無い」は/nai/。

その他の語彙では、/itimja/「一枚」、/ko:ɲja/「蚕飼(こがい)」、/sja:zuti/「金槌(さいづち)」、/zja:ra/「平地(だいら)」、/tukja/「使者(つかい)」、/tettja/「手伝い(てったい)」、/hja:/「灰」、/bja:me/「蠅(バイメからか)」、/hutja/「額(ひたい)」、/mukja/「向かい」、/zenmja/「ゼンマイ」などがあげられる。

これらの語例から、語末音節では短母音/Cja/が現れ、それ以外では長母音/Cja:/が現れることがわかる。ただし、/hja:/「灰」は単音節語で語末でも語頭でもあり、ここでの例外となる(名詞の「手」、「実」などが/te:/, /mi:/のように長く現れることと関係しているだろう)。この現象は、後に述べるように、この方言では語末が重音節で終わることを避ける傾向にあることと関係している。

「木製のかき混ぜ籠」の/gorogja/は/gorogai/から、/sinɲjani/「内緒に」は/sinɲaini/から生じたと考えられるが語源の特定ははっきりしない。また、/isjaka/「口論(いさかい)」もこの仲間であろう。/isjaka/の語形は、おそらく/isakai/から/isakja/を介した変化を遂げたもので、語頭の/i/と語中の/kja/に挿まれた/sa/の子音が口蓋化した後に、二つの口蓋化子音の連続を避けるために/kja/が異化したものと考えられる(isakai > isakja > isjakja > isjaka)。

標準語/Cai/と白峰/Cja/, /Cja:/の対応関係がみられる語例は形容詞を別にすれば、ほとんどの語彙に及ぶほど徹底したものであるとはいえない。例えば、「挨拶」、「財布」、「太鼓」、「二階」、「式台」など、/ai/をもつ一連の名詞や、形容詞「無い」、否定推量の「まい」の/ai/はそのままである。このことは、/Cai/が/Cja, Cja:/に変化したのはかなり古い時代で、現在では終了した変化であることを示していると考えられる。

#### 4. 2 /ju/と/i/

歴史的に/ju/から/i/への変化があったと推定される。北陸地方では一般的な変化である。/hui/「冬」、フイヌギ/huisuŋi/「冬稼ぎ（もとは冬過ぎ、過ぎ＝生活の手段）」、/tui/「梅雨」、/mai/「繭」、/imi/「弓」、/ime/「夢」、/iki/「雪」、/ideru/「茹でる」など。

#### 4. 3 /hi/と/si/

標準語の/hi/と白峰方言の/si/が対応するものがある。/sito/「人」、/sitotuni/「〈一緒に〉の意味」など。/hiro/「広い」、/hi:sama/「太陽」など、「ヒ」に対応する/hi/も現れるので、音韻体系で/hi/が欠けているのではない。これも語彙的な特徴に入ると思われる。

#### 4. 4 その他の対応

語頭の/u/と/o/に関して、標準語の/u/が白峰方言で/o/で現れるものもあるが、これは語彙的なものであろう（標準語:/usaŋi/「兎」、/ukeou/「請け負う」 vs. 白峰:/osaŋime/, /okeo:/）。また、/i/と/u/に関して、標準語の/mi/と/mu/, /ni/と/nu/が紛れることがあるが、これも語彙的なものであろう（標準語:/mise/「店」、/musiro/「筵」、/niŋeru/「逃げる」 vs. 白峰:/muse/, /misiro/, /nuŋeru/）。

#### 4. 5 語末の重音節

語末の/n/の子音、すなわち撥音が落ちるものがある。/daiko/「大根」、/genka/「玄関」など。和語の語末の長母音も現れにくく、白峰本来の語では(/sumo:/「相撲」以外)ほとんど現れない。動詞の意志形、/mjo:/「見よう」、/sjo:/「しよう」/zjo:/「出よう」、/aŋjo:/「上げよう」、/okjo:/「起きよう」等は、表記のような長母音の形もあるが、同時に短母音の形もある。このことはこの方言では語末の重音節を避ける傾向にあるといえる。先に述べた、標準語/Cai/に対応する/Cja:/が語末に現れないのはこの傾向に沿ったものと考えられる。

#### 参考文献

- 岩井隆盛（1959）「白峰（牛首）方言概要」、白峰村史編集委員会編『白峰村史 下巻』、白峰村役場, pp. 276-321.
- 岩井隆盛（1962）「白峰方言の分布と変化」、白峰村史編集委員会編『白峰村史 上巻』、白峰村役場, pp. 425-451.